

会員研究

「大和守日記」

家康ひ孫大名の生活と人生〔その1〕

長尾正和

1. 「大和守日記」とは

江戸時代前期、第三代將軍徳川家光から第五代綱吉の時代、越前松平家の一つの当主に松平直矩という大名がいた。父は家康の次男秀康の五男直基、すなわち、直矩は徳川家康の男子直系曾孫である。

父直基は出羽山形十五万石の藩主であったが、慶安元年（1648）六月に播磨姫路に転封の命を受けてまもなく、姫路城受取を間近に控えた八月十五日に急逝した。相続は家光からすぐに認められ、七歳で大名となる。家光は父直基のいとこになる。

このころ江戸時代もやや安定期に入った時代ではあるが、直矩は諸大名の中でもかなり波乱万丈の人生を送った人物といえる。

大名にはなったが、西国にのみを利かず姫路城主としてはまだ幼すぎるとの理由で、翌年七月に

越後村上十五万石に所替えとなる。その八年後寛文七年（1667）六月彼が二十六歳のとき、播磨姫路の藩主にあらためて任ぜられる。

姫路では順調な大名生活を送っていたが、同族の越前松平家の一つ、越後高田藩で起きたお家騒動、越後騒動に巻き込まれ、十五年後天和二年（1682）二月、四十一歳で蟄居の命を受け、半分以上の七万石に減封の上、豊後日田に所替えという処分を受ける。

そののち徐々に復活への道を歩み、四年後には一部加増されて出羽山形十萬石へ、さらに四年後の元禄五年（1692）七月陸奥白河十五万石の藩主となり、姫路を離れて十年、五十一歳でようやく元の禄高と格式へ戻す。

結局彼はその人生で延べ五場所の藩主を経験することとなったが、

これは江戸時代全体を眺めてみても全大名の中で最多の地を経験した大名となる。

このためのちに「引越し大名」とも呼ばれ、今ではこの言葉が独り歩きして小説や映画でも取り上げられるようになる。しかし、実際の姿はかなり異なることは間違いない、その評価はこの時代の諸大名の中でも相当高く、いわば名將のひとりであったとして良いであろう。

元禄時代、綱吉の重臣が当時の大名一人ひとりについて調べたとされる、大名の人事評価ともいべき史料である「土芥寇讎記」では、厳しい評を受けているものも多々いる中で彼については次のような人物と報告している。

「直矩、生得寛然として將之威自ら備り、殊に文武の両道に心得 或日記記録を好て古戦之雌雄・主將の知恵・謀略の是非を論ず 生得勇知発明に 仁義を正し 忠節を尽んと欲せらるる . . . 当時誉の將と世以て沙汰す」

（金井圓 「土芥寇讎記」）

すなわち、將としての威厳があ

り、文武両道に関心をもち、過去の戦史に学び、仁義を守り、忠節を尽くすよう心掛け、誉の將である、との評判であるという。この直矩が綴ったのが「大和守日記」である。「大和守」はこの家の当主が代々与えられていた官位であった。

原本は明暦二年（1656）から元禄八年（1695）までの三十九年分があったとされる。彼が十五歳から、五十五歳で亡くなる年までである。これらは長い間保存され、昭和に入ってもこの家の当主である松平伯爵邸にあったが、戦災で焼失してしまった。

しかし、幸いにもその一部ではあるが北方文化博物館（新潟市）に筆写本が残されていた。これをベースにして、近世における能、歌舞伎、浄瑠璃等の国芸に関する研究者が残した他の筆写資料も参考にしつつ翻刻（活字化）されたのが、朝倉治彦「松平大和守日記」（日本庶民文化史料集成・第十二巻）所載、と鈴木鉦三の同名の本（村上古文書刊行会）（以下「日記」）である。

ここに記載されているのは、明歴四年（1658）十七歳から寛

文七年（1667）三十六才まで、すなわち彼が越後村上と播磨姫路藩主の時代を中心とする記事であるが、以降の延宝・天和年間には多くが越後騒動関連、そのほか元禄三年までは、国芸関連記事がほとんどだが毎年それぞれ数日分のみである。

「日記」は当初、国芸研究者によつて取り上げられた。直矩が楽しんでいた江戸時代の芸能について演目や出演者など、その内容が詳しく記されているためである。この分野の同時代資料は少ないため、これが格好の研究資料とされている。

例えば江戸城内での能興行について演目はもちろん出席した大名たちの名前、その席順も含めて記録、あるいは自分の屋敷に人形浄瑠璃等の役者をしばしば招き、その内容もこまめに書き残している。このため、しばしば日々遊行三昧であつた大名の代表のような取り扱ひもされるようになる。

しかし、「日記」全体をよく読むと、そのような側面というよりも、家臣団の統治、周辺への温かい気配り、迅速な決断と行動力、トップとしてのリーダーシップ、

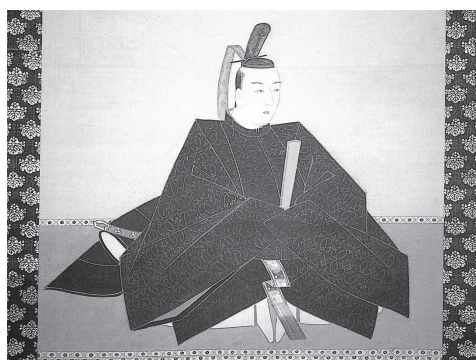
文武両面についての深い関心等々を窺わせるところがあちこちで見られるとともに、領内の事件、財政状況の把握等々にも詳しい記録が残されているなど、統治者としても能力の高い人材であつたことが分かる。

また、「日記」で最も詳しく日々の状況について書かれているのは、彼が十七歳から二十七歳と、現代で言えば大学入学前後から、社会人として成長してゆくころでもあつた。組織のリーダーとしてはいかにも若いとは思えるが、戦国時代から江戸幕府成立ころまでは、若くして統率力を発揮し、十代でも自ら部隊を率いて合戦に臨んだ人物も相当数いたのも事実であり、若い時から活躍ができた時代でもある。

もちろん殿の周辺には優秀な重臣・家臣たちが支えていたのであるが、やはり幼いときからそれなりの帝王教育・英才教育を受けて育ち、このような人物になつたのであろう。

肖像画が残っている。このうち延宝六年（1678）三月のものは、姫路に入つて十一年後、すでに壮年期に入つた三十七歳の姫路

藩主のときである。



「松平直矩像」 孝顕寺蔵

やや若く描かれているものの眉目秀麗、細面で端正な、家康の曾孫にふさわしいエリート貴公子の姿がある。

前置きが長くなつたが、ここではこの翻刻本資料に基づき、この時代のご家門（徳川家一門）大名の生活とその生き方がどのようなものであつたかを見ることとした。なお、内容が多岐にわたるので、以下では諸大名との政治的動き、藩政と参勤交代、生活一般、側近と女性たち、姫路藩主と越後騒動等々に分けてまとめることとする。

2. 諸大名との交際

1) 将軍お目見

まずはこの時代に大名が幕府支配体制の中でどのような関係を持つようとしていたか、あるいはどのように行動したかの政治的動きである。

彼が意識してお会いする、あるいは交際していたのは、将軍家や徳川一門、さらには幕府最高首脳部である大老や老中たちであつた。

大名は参勤で江戸に滞在している間は定期的に江戸城に登城、将軍に御目見し、幕閣トップや諸大名に会い、また、それぞれの屋敷を訪問して親交を深める。

登城を求められる年中行事は新年や五節句、八朔（家康の江戸城開城日の八月一日）などの式日のほか、月次（つきなみ）とよばれる毎月一日、十五日および二十一日の定例日である。（深井雅海「江戸城」）

直矩の場合、登城はまずこのころ芝御成橋にあつた藩邸の上屋敷から、おそらく数十人にのぼる供のものを連れて江戸城大手門前の下馬所まで進む。

一般の大名はここで駕籠を降り

なければならぬが、彼はその格式からこの先も駕籠に乗ったまま侍六人と草履取一人、鉄箱持二人も連れて下乗橋まで行くことができる。そこからは御三家以外の大

名はすべて駕籠を降りなければならず、歩いて玄關まで進んだ。江戸城で彼が控えの間として与えられていたのは「大広間」席である。

城内では大名たちは官位によって「殿席」とよばれる控えの間が厳然と定められており、全部で七つあった。最上格の「大廊下」席では、上之部屋には御三家、および館林宰相（のちの綱吉）、甲府宰相等の將軍家一族が、また、下之部屋には加賀前田家、福井・越前松平宗家などが入った。

次の「溜之間」席には井伊家など譜代大名のトップが、さらに「大広間」席には国持大名である薩摩島津家、仙台伊達家、熊本細川家、筑前黒田家等々の大大名に加え、彼を含む越前松平家のようなご家門等々二十数家、いづれも官位が従四位下以上の大名が入った。直矩は承応三年（1654）十三歳にして早くもこの官位を授かっている。（徳川諸家系譜第四）
彼が二十六才となった寛文七年

（1667）正月の新年の登城の様子が記されている。

寛文七年正月大朔日「卯の后

刻 登城、ただし狩装束。辰

の刻御規式始 巳の刻 白書

院に於いて首尾よく年頭の御

礼申しあぐ 太刀目録を以て

お目見 御杯頂戴 御小袖拝

領 退出御厩御馬見所にて

装束を直し 礼を勤める。

久世大和守殿 本田美作守殿

内藤出雲守殿 土井兵庫守殿

稲葉美濃守殿 阿部豊後守殿

板倉内膳正殿 酒井雅樂守殿

館林宰相殿、紀伊大納言殿

・・・松平越後守 高田殿お

礼申しあぐ 越後御裏方入る

祝 松平出羽守入り逢う・・

紀伊大納言殿 同宰相殿・・」

登城は卯の后刻、すなわち朝の七時頃と早い。かれの登城時間はほかの日も同様で、城の開門は明け六つ、すなわち朝六時前後なので、早々に入っていることになる。

新年の儀式は辰の刻、八時過ぎに始まった。巳の刻、十時頃には將軍家綱にお目見し年頭のご挨拶を無事伝えることができ、盃を頂

戴した。新年の儀式に限らず定例の登城日においても將軍のお出ましはおおむねこの時刻であった。

將軍にはすっかりご挨拶できることを心がけていたようで、ほかの登城日でも「首尾よくお目見」という表現が多く出てくる。

従四位下（四品）以上の大名は、將軍へ直接新年の祝意を申し上げることができ、「独礼」が許されていた。これ以下の官位の大名は、集団でのお目見、「立礼」であった。このとき幕政のトップはこの前年に大老職を任せられた酒井忠清、老中は稲葉正則、久世広行、土屋正直、板倉重矩であったが、土屋以外の全員に挨拶している。

また將軍家一族では紀伊大納言にお会いしている。紀伊徳川家初代の徳川頼宣である。家康六十一歳の時に生まれた十男、直矩から見て父直基の叔父になるが、この時六十一歳であった。館林宰相綱吉（家光四男）はこのとき上野館林二十五万石の藩主である。

綱吉に対しては、このほかにも機会のある都度ご挨拶することに務めていた様子がかがえるが、のちに第五代將軍に就任して間も

なく、先に述べた越後騒動にかかわる再審で直矩は綱吉から厳しい処分を受け、豊後日田への所替えとなるが、このような日ごろの氣遣いがあまり効果はなかったことものちになってわかる。

なお、將軍家綱は決して丈夫な方ではなかったと見え、しばらくお目見できないこともあった。この数年前、万治二年（1660）九月から十一月始めまでは四回登城し、「〇〇養生中につきお目見ならず」といずれもお会いすることができなかつたが、次の登城日には、姿を現し、直矩も無事ご回復されたことを喜んでいいる。

万治二年十一月十五日「登城
午の刻表へ出られ いろいろ
御礼あり 悦びて帰宿」

2) 越前松平家

同族の越前松平家の面々については、城を退出したのち、いとこにあたる越後高田二十六万石藩主松平光長の屋敷に赴むき、彼はもちろんのこと、その母である高田殿、光長の奥方等々に挨拶をしているが、これは新年の恒例となっていたものと見える。

奥方というのは毛利家第二代藩主秀就の娘で、毛利家が越前家と婚姻関係を結んだ象徴として受け取られている女性である。また、ここには伯父であり、直基亡きあと直矩の父替わりを務めた出雲藩主松平出羽守直政も同席している。

高田殿というのは將軍秀忠とお江の三女になる勝姫（勝子）、越前松平宗家の当主であった秀康嫡男忠直の正室である。忠直はこの四〇数年前、元和九年（1623）不祥事により改易となり、豊後大分へ配流となるが、勝は豊後には行かず、息子で越後高田藩主となっていた光長の屋敷に住んでいた。

「日記」では、彼女にはほかにもかなりの頻度でお会いしていることがわかる。どのような会話があったか記されていない。大変気の強い女性であったとされるが、秀忠の娘として將軍家に対して越前松平一家一族でサポートすべく、常に意識していたのではないかと印象がある。

彼女は忠直の後を継いで越前松平宗家藩主となった松平忠昌（忠直弟）の嫡子光通に孫の国姫を嫁がせている。

直矩も、その役割を有する女性であることを意識して彼女に接していたのではないであろうか。

3) 出来事

話はそれるが、登城時に將軍あるいは幕閣からは、のちになって歴史的に大きな意味を持つ事柄が伝えられることもある。

万治三年（1660）五月の月次の登城時には仙台伊達家に対する処分の発表があった。

万治三年五月二十八日「御城に於いて辰の刻仰せ渡しの趣保科肥後守殿、酒井雅樂守殿・・・連座 上意の趣酒井雅樂守諸大名に申し渡す この度陸奥守逼塞仰せ付けの儀：先代々心入れご奉公達するゆえ跡職相違なく倅亀千代に下され置くなり 後見に伊達兵部少・田村右近 これは陸奥守兄弟なり・・・」

伊達家は言うまでもなく東北における六十二万国という雄藩であったが、初代政宗の孫の綱宗は万治元年（1658）に亡くなった父忠直の後を継ぎ第三代仙台藩

主伊達陸奥守となった。しかし酒色におぼれ藩政を顧みずとの藩内から幕府への訴えがあり、二年後の万治三年始め二十一歳のとき幕命により逼塞、隠居させられた。ここでは、綱宗嫡男でまだ二歳の綱村（亀千代）がその跡を継ぐことを認める、と諸大名の前で発表されたのである。

大名にとってお家改易や存続は最大の問題である。このような大名不行跡となればこの当時その時点でお家取り潰しとなつてもおかしくはないが、相次ぐ外様大名の改易も次第に収まり、徳川支配体制も確立し、安定化しつつあったこの時期、東北最大の藩取り潰しによる混乱を避けたのであろうか。

この幼年での相続は、のちの伊達騒動の発端となった。幼君綱村には当然ながら後見人が付いた。伊達兵部宗勝、政宗の十男で一関藩主であるが、やがて専横ぶりを同族から訴えられたため、その裁定に時の大老の酒井雅樂守が乗り出し、寛文十一年（1671）三月その屋敷で審問が行われた。

その場において事件が起きる。待機していた宗勝の奉行（家老）の原田甲斐が、訴えを起こした同族の伊達宗茂を斬殺し、自身も討ち取られたのである。これにより宗勝の一分が行われ潰しとなり、関係者の処分が行われた。藩主綱村は十三歳となつていたが、また若年としてお咎めなしとなり、このような騒動にもかかわらず、またもや伊達藩の存続が認められることとなる。

もう一つ、重要事項の大名への伝達が突然の登城要請でなされることもある。

寛文三年五月二十三日「辰の中刻登城・・・御目通り・・・林民部卿ご条目を声高に読む 追い腹の義 以前より仰せ渡らせられているが 近年でも 猶多くこれ以後は固く禁ずる・・・」

前日の老中より手紙が届いたので、この日登城すると、家綱の前で「寛文令」と呼ばれる武家諸法度が申し渡された。殉死の気風がまだ残っていたので、以後これを固く禁止することが通達されたのである。

4) 情報収集

諸大名とのお付き合いの話に戻

るが、直矩の交際の際の際のキーパーは「振舞」である。

これは自分の屋敷へ招待し、演劇や料理を振舞って接待するもので、反対に諸大名からお招きを受けることも相当多い。

將軍家綱の後見人であった家光の異母弟、保科肥後守正幸・羽羽山形二十三万石の三田屋敷にほかの大名たちと共に招かれたときは(寛文三年三月二六日)、正之家臣等と共に食事と茶のもてなしを受け、所蔵の雪州団扇三幅を鑑賞できたことを喜び帰宅している。

酒井雅樂守邸に招かれた際は(寛文三年五月十五日)、招待客も多かったが、舞樂を楽しみその演目、演者等を詳しく書き残している。

ではなぜ諸大名がこのように幕府や徳川一門と、あるいははかれら相互で親密な関係を持つとうとしたのか。

関ヶ原の戦いからすでに半世紀以上が過ぎ、大名が自分の領地を自らの軍事能力で獲得していた時代と全く変わり、全国の土地はすべて徳川幕府のものとの扱いとなり、大名それぞれの領地支配は幕府の命により「安堵」されること

で初めて可能になっていった。

さらに、改易(領地没収、縮小)、所替(領地変更)、加増等々、大名の人事権はすべて幕府が握ることとなる。

おそらく大名たちの最大の関心事は、これらに関連する出来事についての情報であろう。もちろんこういう場に関心を持たず、幕府にはある程度の距離を置いていた薩摩島津家のような大名もいたことも事実だが(山本博文「江戸お留守居役の日記」)、多くの大名たちは主に江戸での情報収集、相互の情報交換などを頻繁に行っていた。国元にいる間も、江戸藩邸に重臣が配置され、幕府との窓口と情報収集の役割を果たした。

あとでも触れるように直矩にとって姫路藩主は最も願っていた地位であったことは間違いないが、その鍵となる事件、すなわち、姫路藩主榊原政房が二十七歳でなくなつた(寛文七年五月二十四日)ことは、わずか十日後の六月四日には、ほかの情報も含めて国元村上に戻っていた彼の所まで江戸藩邸から報告が来ている。

直矩が江戸出府すべしとの突然の老中奉書を受け取つたのは、そ

の五日後六月九日、さらにその二日後の十一日には供の家臣団大勢を引き連れて江戸に向け出発している。事前の情報を得ていたので、迅速な行動が可能になつたのであろう。

彼が登城して將軍家綱から直接に姫路藩主としての転封の命を晴れて受けたのは、江戸到着の翌々日、六月十九日であつた。

(以下次号)

